

奈良時代とはどんな時代かわかりやすく解説 (前編)

飛鳥時代の後半は大化の改新が起こって、天皇中心の国づくりが始まったね。
実際に人々の暮らしはどう変わったんだろう？

都が作られる

これからは天皇が中心となって本格的に国づくりをはじめるとだ。
そのためには、皇族（天皇の一族のこと）と大和朝廷のトップの人たちが集まる「町」が必要だよ。

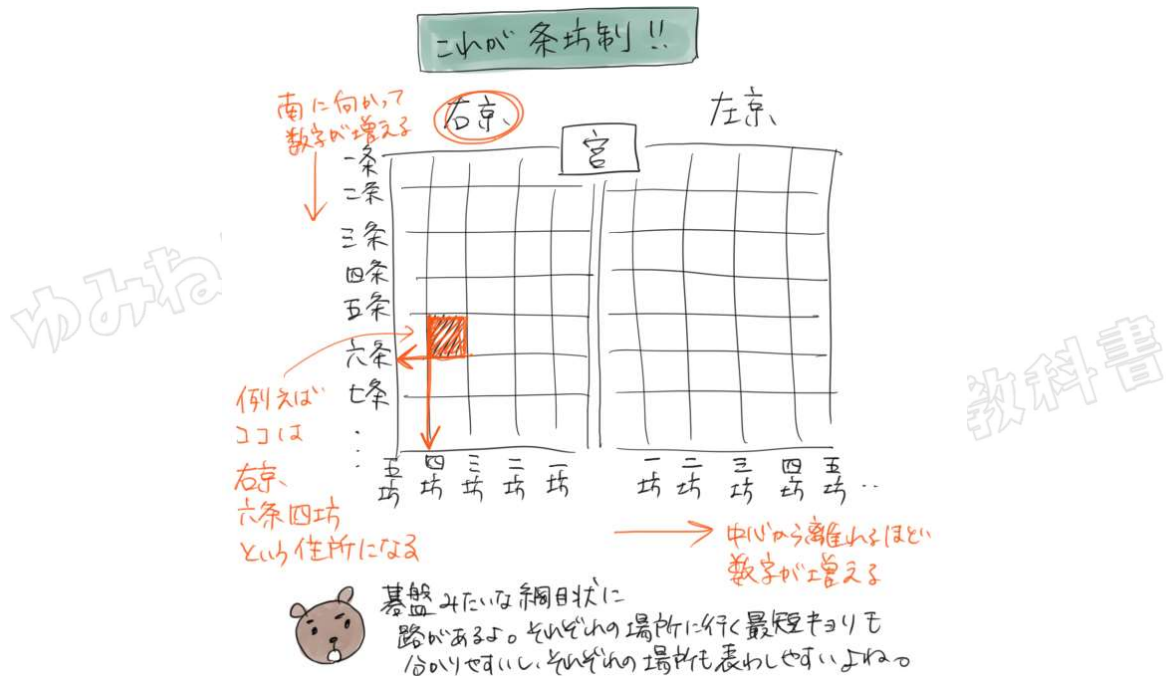
現代の「首都」である東京のことを考えてみて。
皇居（皇族のおうちのこと）もあるし、国の政治の中心になる国会や、他にも犯罪に対して罰を決める最高裁判所とか、国のお金の中心になる日本銀行とか、重要な施設が集まっているよね。

この時代もおなじ。
国づくりの中心となる人々が集まる町を作ったんだ。
それが「都」だよ。

都を作る時には、今回も中国の都の作り方を参考にしたんだ。
この時の中国は「隋」が滅ぼされて、「唐」という王朝（王様が支配する政府のこと）が中国を統一していたよ。
唐の都のデザインは囲碁で使われる碁盤の目のように路が交差している左右対称の方形（四角のこと）。
※このデザインのことを条坊制（じょうぼうせい）と呼ぶよ。



なぜそんな形なのかというと、風水的に縁起がいいとか、儒教（中国で起こった教えのこと）の教えに従っているとかが言われているけど、なにより網目状に道があれば移動の時に便利だからね。



※京都の町は、この「条坊制」で作られた「平安京」の形が今でも残っているよね。

藤原京が作られる

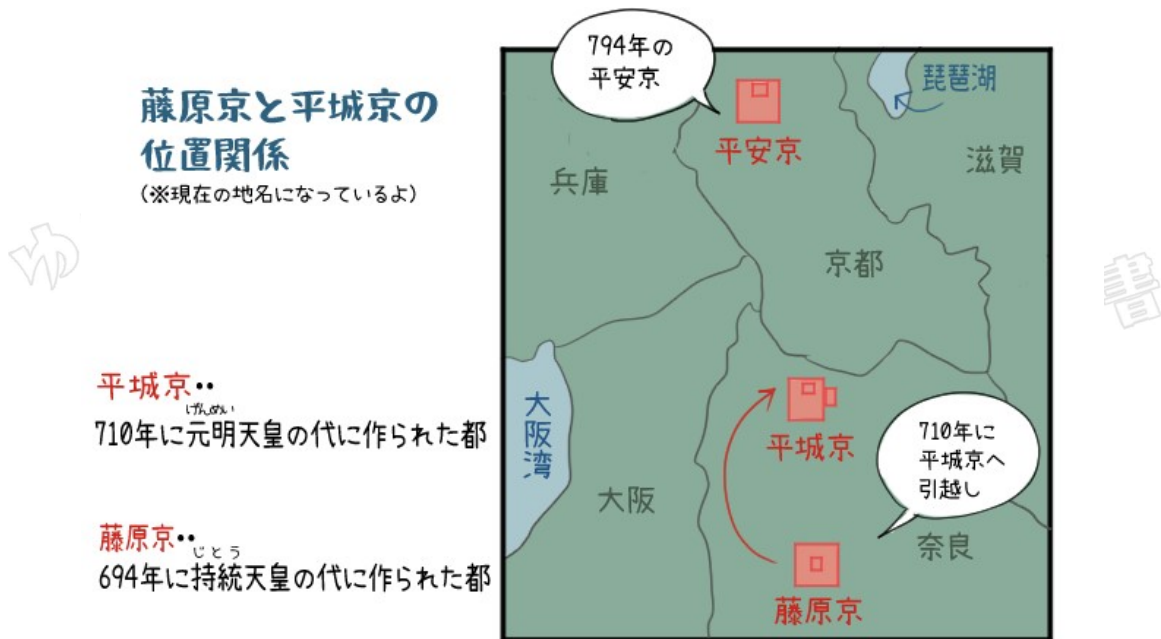
こうして持統天皇の代である694年に今の奈良県の南の方（飛鳥地方に近い場所）に作られた最初の都が「藤原京」だよ。

平城京とか平安京にくらべると、「藤原京」はあんまり聞いたことがないかもしれないね。710年に平城京ができるまでの16年しかなかったからね。なぜたった16年でまた平城京に引越したのかというと、確実な理由はわかっていないけれど、病気が流行って縁起が悪かったとか、地方から来るときのアクセスが不便だったとか言われているよ。唐の都である長安と比べて見劣りしちゃっていたから、もっと立派な都を新しく作った、とか、飛鳥には力を持った豪族が多いから「ちょっと離れておこうと考えた」という説も有力だね。



平城京が作られる

というわけで、元明天皇の代の710年には平城京に都は移されたんだ。
場所は藤原京より北で、現在の京都との境に近いくらい。



「なんと（710）綺麗な平城京」という覚え方が有名だね。
この平城京が出来たころから平安京ができるまでの80年間を「奈良時代」と呼ぶよ。
奈良に作られた都が中心の時代だからだね。

ところで、この頃から「貴族」という言葉が登場してくるけど、ピンと来ているかな？
今までは「豪族」という言葉が出てきていたよね。
豪族は、地方で栄えている一族のことで、貴族は「都」で天皇に仕えながら栄えている一族のことだよ。

中大兄皇子と一緒に蘇我氏を倒した中臣鎌足っていたよね。
中臣鎌足は、大活躍したので中大兄皇子に「藤原」という新しい氏をもらっていたよ。そして、都でも重要なポストについて「貴族」になったよ。



このあとから出てくる貴族の「藤原氏」は、中臣鎌足の子孫だったんだね。
「藤原氏」とか「貴族」はこの後の時代で重要になってくるから覚えておいてね。

奈良時代の民の暮らしは？

都作りで働かされた

「都を作った」なんて簡単に言っているけど、一体だれが作るのかというと、皇族や貴族以外の「農民」と呼ばれる普通の人たちが作っているよ。

都は藤原京も平城京もが広さは約25km²。
一辺が5kmの正方形をイメージしてね。

こんなに大きい都を作るんだから、とても大変な工事になるよね。
農民は、強制的に都を作る工事をするために連れてこられて働かされたよ。
雨が降らないかぎり休みもなく、もらえる食べ物も必要最低限。
我慢できなくて逃げ出す人もいたよ。
でも、逃げて捕まってしまうと、鞭打ちの刑にあたりしたんだ。
まるで奴隷みたいだよ。



長い間働かされて、やっと仕事が終わって帰れるのかと思えば、故郷に帰るまでの食料がもらえないまま追い出されて、結局故郷にたどり着けなくて餓死（食べ物が無くて死んでしまうこと）してしまう人もいたんだって。

なぜならお給料はもらえたんだけど、そのころのお金「和同開珎（わどうかいじん）」は都の中やその周辺の限られたところでしかまだ使えなかったから、結局帰り道で食べ物を買うことはできなかったんだよ。お給料をもらってもほとんど意味がなかったということだね。

重い負担に苦しんだ

さらに、農民にはいろんな負担が決められていたよ。
「租（そ）・庸（よう）・調（ちょう）」だね。




租庸調というのは「税」のこと。

「租」は獲れたお米の3パーセントを都に渡さなければいけなかったよ。

「調」はその土地の特産物（その土地ならではの食材や品物）

「庸」は布を織って渡さなければいけなかったんだ。（または都で働く）

奈良時代の農民が負担した税「租・庸・調」とは

租	庸	調
 <p>田んぼでとれた 稲の3%を おさめること</p>	 <p>都ではたらきたく ない人は、かわりに 布をおさめること</p>	 <p>地域ならではの 特産品を おさめること</p>



つまり、都で貴族や皇族が食べる食材、使う道具、着る服を作るための布を農民たちから集める必要があったんだね。

税のほかに雑徭（ぞうよう）という負担もあって、これは都で土木工事をして働くことなんだ。

兵役というのもあるって、これは都で衛兵として警備をするか、中国や朝鮮に攻め込まれないように九州地方で守る「防人（さきもり）」として働くことだよ。

そういう税があったってどうして分かったのかというと、都の跡地から「木簡（もっかん）」という木の板が見つかったんだ。この頃は紙なんてすごい高級品だったんだ。だから木の板に「これはどこから取り立てた税か」などを記録して、品物と一緒に都へ運んだんだよ。荷札（にふだ）の役割だね。



この木簡がたくさん見つかって、この頃にどんな税があって、都の貴族や皇族がどう暮らしていたかが分かったんだね。

農民の暮らしが大変だったことは、「万葉集」の中の「山上憶良（やまのうえのおくら）」の作品を読んでも分かるよ。



万葉集というのは、奈良時代に詠まれた和歌を集めた日本で最も古い和歌集。

収録されている和歌も、天皇が詠んだものから農民や防人が詠んだものまで、身分に関係なく入っているのが特徴。「令和」の元号の元になったということでも有名だね。

山上憶良がこのころの農民の生活の様子を詠んだ和歌

「伏せ庵の曲げ庵の内に直土に藁解き敷きて父母は枕の方に妻子どもは足の方に囲み居て憂え吟いかまどには火気（ほけ）吹き立てず甑（こしき）には蜘蛛の巣かきて飯炊くことも忘れて…しもと取る里長が声は寝屋処まで来立ち呼ばいぬ…」

意味は

「倒れたような曲がって傾いている家の中、地面に直接藁（わら）をしいて、お父さんとお母さんは枕の方に、お嫁さんと子供は足の方に、自分を囲んで固まって雑魚寝（ざこね）している。

かまどには火の気なんてなく、甑（米を蒸むするための道具のこと）にもクモの巣が張っているくらい使っていない。

それなのに、ムラの役人である里長が家の入り口までやってきて『税を出せ』と叫んでいる。」



農民は食べ物もなくて大変な中、厳しい税の取り立てがあった様子がわかるね。



この時代の流れをざっくり言うと？

天皇中心の国を作るために、都を作ることに（貴族の登場）

↓

都を作るために、農民を働かせる

↓

都へ納おさめる米や布などの税と強制労働が農民を苦しめる

6年生はココを抑えればOK！まとめ

年号をチェック！

710奈良に都がうつされる

奈良時代前編まとめ

※赤いキーワードは必ず覚えよう！

- 710年に平城京が作られた。
- 農民は租庸調の税や労働を強制的に負担させられた。

